

タマネギ白色疫病情報第1号

令和7年1月31日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

**早生品種での発生が目立ちます。
今後の気象に注意し、被害拡大防止に努めましょう。**

1 発生状況

1月下旬の巡回調査（18ほ場）では、タマネギ白色疫病（図1，2）の発病株率が4.50%（平年0.30%、前年0.00%）、発生ほ場率が44.4%（平年7.23%、前年0.00%）で、過去10年間と比較して発病株率、発生ほ場率ともに最も高い結果でした。早生品種での発生が多い状況です。

名古屋地方气象台1月30日発表の1か月予報によると、向こう1か月の気温は平年並または低いと予想されていますが、期間の後半は平年並または高いと予想されています。本病の感染に好適な温度での降雨に注意が必要です。



図1 白色疫病による葉の下垂



図2 白色疫病が多発したほ場

2 本病の生態等

発病は主に葉で、はじめに葉の中央部付近に周縁部がやや不鮮明な油浸状で青白色の病斑を生じます。病斑が拡大すると、病斑部が湾曲して葉が下垂したりよじれたりします（図1）。病斑は古くなると白色～乳白色になり、健全部との境界は明瞭になります。多発すると（図2）玉の肥大が悪くなります。

タマネギ白色疫病的の第一次伝染源は、被害葉、りん茎、根などとともに土中で越冬した胞子(卵胞子や厚壁胞子など)です。菌糸は5～28℃で生育します。菌糸の生育や遊走子のうの形成は15～20℃前後が最適とされています。病斑上の遊走子が雨滴等を介して周囲の株に感染します。菌の伝染やまん延には雨滴や水が大きな役割を持っています。

3 防除対策

- (1) 排水不良のほ場で発生が多いので、排水に努めましょう。
- (2) 予防的な防除に努め、発生を確認した場合はただちに治療効果のある薬剤で防除しましょう（表）。また、降雨後は速やかに薬剤防除を行いましょう。
- (3) 薬剤感受性の低下を避けるため、作用機構が同じ薬剤の連用を控え、異なる FRAC コードの薬剤をローテーションして使用しましょう。

表 タマネギ白色疫病に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用時期	成分名	FRAC コード
ダコニール 1000	収穫 7 日前まで	TPN	M5
ザンプロ DM フロアブル	収穫 7 日前まで	アメトクトラジン ジメトモルフ	45 40
プロポーズ顆粒水和剤	収穫 7 日前まで	ベンチアバリカルブイソプロピル TPN	40 M5
ベトファイター顆粒水和剤	収穫 7 日前まで	シモキサニル ベンチアバリカルブイソプロピル	27 40
リドミルゴールド MZ	収穫 7 日前まで	マンゼブ メタラキシル M	M3 4
フロンサイド SC	収穫 3 日前まで	フルアジナム	29
ジマンダイセン水和剤	収穫 3 日前まで	マンゼブ	M3

FRAC コードは殺菌剤の作用機構による分類を示す。

FRAC コードの詳細は、https://www.jcpa.or.jp/assets/file/lab/mechanism/code_pdf01_2024.pdf を参照する。

薬剤の使用に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努める。

同一の有効成分を含む農薬を使用する場合は、有効成分の種類ごとの総使用回数に注意する。